

かもめ小唄 作詞・作曲 不詳

(春)
富士は藍色 むらさきや筑波
銀に流るる隅田川

土手の桜が一同に笑うつて
かもめが仲良い向島

(夏)
今も昔も変わらないものは
姿涼しき都鳥

舟の青藤を漏るるは小唄
情けと意気地の向島

(秋)
月には風情を言問辺り
待乳今戸に灯が点る

思い白髭 秋の夜長い
尽きせぬ眺めの向島

(冬)
雪の水神 今宵は積もる
恋は段々深くなる

想いこがるる綾瀬の葦を
乱れて飛び立つ冬の雁



【現代語訳】

西は富士山が藍色に輝き、東は紫に映える筑波山だけれど、

こちらの隅田川は銀が流れるつてわけ
春は土手の桜が一面に咲いて、まるでバーカつて、笑っているようだね

鴉は仲良く飛んでいて、まるで向島の「かもめ」ちゃんのようにだね

今も昔も変わらないものは、うぐくん、
夏姿の都鳥って言われる粋なおネエちゃんかなあ

あれー、屋形船に設えた真新しい藤から漏れ聞こえてくるのは
芸者が歌う小唄だよ

向島の芸者さんてさ、色づばくて情けが深いけど、しつかりしてるよなあ

秋の月を眺めるには風情のある言問渡り場辺りかね

ああ、今頃は待乳山や今戸橋の遊郭に灯りが点つて、いるだろうな

オレはこちら側の白髭神社のお茶屋に行つてみるか 秋の夜は長いしな

向島のあの子は可愛いから、ずつと眺めていても飽きないよ

水神の渡し場辺りは雪になつてきたから、今宵は積るなあ

あの子への積る恋心が段々と深くなつてね
思い焦がれて彼女のもとへ、綾瀬の渡し場の茂つた葦を舟で分け入つたら
冬に渡つてきた雁がワーツと飛び立つように、彼女に逃げられたよ、クソッ

【解説】

(春の段)
かもめ小唄は、向島芸者家のお座敷での出しものである。

作詞、作曲は不詳とあるので、男女、どちらの側から話した小唄かは判らぬが、
ここでは、女である向島の芸者さんが男の気持ちを歌つたものとしよう。

男女の側が入れ替われば、筆者の現代語訳も変わるのだけれど、お座敷の小唄とは、
元々そのような両面を兼ね備えた詩歌となっている。男性客と女性の芸者の

両方の共感がなければ余興は面白くないであろう。
歌詞は春、夏、秋、冬の構成になっていて、出だしは三拍子の対句である。

西の富士山、東の筑波山、今を流れる隅田川である。昔、その隅田川の兩岸には
多くの遊郭があり、春の光を浴びて銀色に水面は輝いて流れてくるのであるが、

当時、「銀」はお金のことであり、お金が散財して流れ去つて行くことを掛けている。
墨田川兩岸は桜の名所であるから、春ともなれば桜花爛漫として人々の心を和

ませ、花見の酒はそれと共に財布の紐も、男の理性も溶けて流れるらしい。
他人にしみれば、あるいは、今で云う接待をしてくれる、お姐さんと呼ばれる

女性達からしてみれば、「バーカ」と笑われているのかも知れない。

花街の世界では、芸者になるとする、半人前の若い女性を「半玉」(はんぎょく)
という。ラーメンの小さく替玉(はんたま)ではない。ゆで卵の半分でもない(笑)。

お金を稼げるという、玉(ぎょく)＝値打たのあるものの半分という意味でもあろうか。
向島花街では、半玉としてお座敷に出て花を添える、芸者見習いの女子達を

「かもめ」という。料亭やお茶屋の襖の向こうでは「かもめ」同士でキアキア言つて
いるだろうから、歌詞では、仲良い向島の「かもめ」と云うわけである。

(夏の段)

「伊勢物語」の東下りの段に有名な歌がある。

名にし負わば いさ言問む都鳥
我が思う人はありやしやと (在原業平)

都鳥とは隅田川沿いではカモメのことである。東京湾に近い隅田川河口の近くでは
カモメが生息している。夏、秋の段では平安時代のプレイボーイとして有名な、の

在原業平の歌を題材として引いている。
隅田川沿いで、今も昔も変わらない風情とは、女の子の浴衣姿だと言っているので、

夏の暑い盛りに着物の胸を開けたオバチャンは違う。ちよと凜としていて、
お座敷に出ている「かもめ」ちゃんにも似て、いかにも涼し気に着こなしている。

目を川面に転ずれば、屋形舟がやつて来た。往時の大方の屋形船は、今の様に大き
くはない。猪牙船と呼ばれる、タクシー代わりの船よりは大きい、数人の客を乗せ

て隅田川を上下する。中央部に屋根付きの囲いを設けた、舟遊び用の船である。
その囲いには夏季に切り取つた青々とした葦の簾を掛けて、川風を入れて涼をとる

設定であり、また、中に居る人達が見えないようにする目隠しでもある。
節節に曰く、

吹けよ川風 あがれよ簾 中の芸者の顔みたや
佃々といそいで押せば、汐が逆さりで櫓が五たぬ

簾は巻き上げてくれていればいいものを、簾を下ろして川下へ漕いでゆく屋形船なら、
漕いで追いつき、中の芸者さんの顔を見たいというのが人情である。だから、いまにも

川風がヒューと吹いて、簾を上げてくれなかなあと云うわけである。でも、佃の方に
急がせて船を漕いでいて、満ち潮に逆らっている、追いかかなかつたでしょう。ハハハ。

(秋の段)

その青々とした簾から漏れてくる三味線の音、そして小唄を歌う声。

「風流船揃え」という長唄がある。その一節は、春の設定だから少し違ふけれど、
隅田川の同じ風情を謡っている。曰く、

恋の閑屋の里近く 花見の船の向島
軒を並べし屋根船の簾の内の爪弾は もしやそれかと人知れず

「水神の渡し」に雪が積もってきたから、岸の内側にある向島でも今夜は雪が積もる
だろうと言う。「積る」は「男女の積る思い」の掛詞であるから、雪が深く積もつてゆ

く様は、段々と恋心が深くなつて、その情念の炎が身が焦がれるわけである。
そして、「焦がれる」という言葉は「舟を漕ぐ」に重ねてある。

あれー、右手の撥でなく、左手の指ではじいて弾く、あの三味線の弾き方は、
もしかして富士の家の桜子さんかなあ、歌声は千代田の桃子さんではあるまいか、
気になるなあ、てな具合である。

向島の芸者は風流で、客前ではキツチリと座を取り持つてくれるけど、惚れた客に
は恋心も寄せるし、嫉妬もするという、男のロマンを極き立てる存在であるのだ。

江戸川は中川によつて荒川にバイパスし、荒川は隅田川をバイパスとする。
この四河川が東京湾に流入する。

荒川を横切る綾瀬川と隅田川とが更に合流する三俣の位置が鐘ヶ淵である。
隅田川は鐘ヶ淵で大きく直角に近い程に蛇行し、まるで大工道具である金属製の

「かねのく」(指鉋)の様であるから、その名が付いたとも、この淵に釣り鐘を落とし
てしまったからとも、諸説があるらしい。「淵」とは、流れは穏やかだが深いところを
云う。鐘ヶ淵は隅田川が大きく蛇行して流れが淀むのだが、流れの圧力で水深が

深くなつているのだろう。

(冬の段)

江戸時代の隅田川は下流から上流へ、永代橋、新大橋、両国橋、吾妻橋、千住大
橋の五橋であった。だから、唄に出てくる地名は水路に架かる橋の名前もあるが、
五橋以外は渡し場の名前であった方が正確かも知れない。

「風流船揃え」という長唄がある。その一節は、春の設定だから少し違ふけれど、
隅田川の同じ風情を謡っている。曰く、

恋の閑屋の里近く 花見の船の向島
軒を並べし屋根船の簾の内の爪弾は もしやそれかと人知れず

「水神の渡し」に雪が積もってきたから、岸の内側にある向島でも今夜は雪が積もる
だろうと言う。「積る」は「男女の積る思い」の掛詞であるから、雪が深く積もつてゆ

く様は、段々と恋心が深くなつて、その情念の炎が身が焦がれるわけである。
そして、「焦がれる」という言葉は「舟を漕ぐ」に重ねてある。

あれー、右手の撥でなく、左手の指ではじいて弾く、あの三味線の弾き方は、
もしかして富士の家の桜子さんかなあ、歌声は千代田の桃子さんではあるまいか、
気になるなあ、てな具合である。

向島の芸者は風流で、客前ではキツチリと座を取り持つてくれるけど、惚れた客に
は恋心も寄せるし、嫉妬もするという、男のロマンを極き立てる存在であるのだ。

江戸川は中川によつて荒川にバイパスし、荒川は隅田川をバイパスとする。
この四河川が東京湾に流入する。

荒川を横切る綾瀬川と隅田川とが更に合流する三俣の位置が鐘ヶ淵である。
隅田川は鐘ヶ淵で大きく直角に近い程に蛇行し、まるで大工道具である金属製の

「かねのく」(指鉋)の様であるから、その名が付いたとも、この淵に釣り鐘を落とし
てしまったからとも、諸説があるらしい。「淵」とは、流れは穏やかだが深いところを
云う。鐘ヶ淵は隅田川が大きく蛇行して流れが淀むのだが、流れの圧力で水深が

深くなつているのだろう。

(冬の段)

織物で斜めに交差する折り柄を「綾」という。「淵」は水深は浅いけれど、速く流れ
る箇所である。隅田川に合流している三俣の箇所の、綾瀬川の方に渡した橋が、
綾瀬橋であり、向島一帯の終端である。

冬の段の解説は難しい。
かもめ小唄の作詞者は、「江戸名所花暦」という江戸名所百景の浮世絵を知つて
たに違いない。その一枚に綾瀬川河岸に「ねむの木」が描かれているからだ。

「ねむの木」は夜になると葉を合わせることから、中国では夫婦円満の木とされ、
「合歡木」と書き、男女の性の快楽を象徴する木である。だから、作詞者は冬の段に
この地、「綾瀬」を選んで、主人公に恋人との思いを遠げさせつつもりであつたのか。

一方、三俣に分かれる綾瀬川は、「三瀬の川」を想起させる。即ち、それは三途の川
の別名であり、主人公の男の行く末でもあろう。なぜなら、綾瀬橋と聞けば、鐘ヶ淵

が浮かび、その鐘ヶ淵は、「恋の淵」を想起させ、セックスにはまつてしまった男の未来
でもあるからだ。微妙に掛けてある詞や名所絵で、かもめ小唄の主人公の心と
未来とを表現しているのである。

葦が生い茂る綾瀬川に男は漕ぎ出し、思い焦がれる彼女を訪ねると、雁がワーツと
飛び立つ様に逃げられちゃった、と云う「落ち」が冬の段の最後に付いている。

「雁」は冬鳥である。この冬鳥の鳴き声を「雁が音」という。暮引きの寂しさに使われ
る効果音としての「雁が音」や「雁」は、サヨナラを意味する。

だから、雁でかもめ小唄はおしまひとなる。

今和二年九月七日

大中正 正比呂 拙訳